九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

ジャン＝ジャック・ルソーと国王暗殺未遂ダミヤン事件（1）

阿尾, 安泰
九州大学大学院言語文化研究院

https://doi.org/10.15017/1924424

出版情報：言語文化論究. 40, pp.15-25, 2018-02-27. 九州大学大学院言語文化研究院
バージョン：
権利関係：

ジャン＝ジャック・ルソーと国王暗殺未遂ダミヤン事件（1）

阿　尾　安　泰

1757年１月５日、ヴェルサイユで馬車に乗ろうとするルイ15世は、暴漢ダミヤンに襲われる。ナイフで刺されるが、それが致命傷となることはなかった。これが国王暗殺未遂のダミヤン事件である。この事件と18世紀の思想家ジャン＝ジャック・ルソーの関係を扱うのが本論の主題である。

ただこれは当惑させるテーマである。これまで、ルソーがこの事件に関与したという資料は発見されていないし、これからもそれが発見されるという可能性は、限りなく乏しいからである。実証面からルソーとダミヤンを関係づけることはきわめて難しいとさえ言える。確かに、ダミヤン事件はこの時代において大事件であり、それが同時代の人々に与える影響は大きい。そうした一般的な影響を考えるということならば、ことさらルソーだけを選び出し、その関係を問題にする必然性はないように思われる。

ルソーにとって、この事件の意味を考え、そこにこだわることで、ルソーの作品の読解に新たな地平を開くことができるならば、こうしたアプローチの有効性が確認できるはずである。本論においては、そうした可能性のもとに探究を続けていくことにしたい[1]。

１：ダミヤン事件

１－１：経過

1757年１月５日、体を刺されたルイ15世は、自分を襲った者の捕捉を命じるとともに、殺してはならぬとの指示をくだした。傷が深くないことは認めながらも、王はその剣に毒が塗ってある可能性を考え、最悪の事態を想定する。臨終に備えるのである[2]。

この事件の知らせが国中を走り回る。犯人が確保されたので、捜査の主な課題はその動機と共犯者の有無となる。ダミヤンは当初から、決して王の殺害が目的ではなく、あくまでも王への警告のために犯行に及んだと言明する。また共犯という側面においては、黒幕としてのイエズス会の存在が噂として事件当初からささやかれていた。すでに、犯行翌日には、イエズス会士の文書で、今回の事件の背後にイエズス会の暗躍を想定する動きがあることを示唆するものが現れている。そして、この文書の作者としては、背後に痙攣派などの狂信派の存在を考えている。ただ捜査が進んでも、具体的な共犯者の姿が浮かび上がってくることはなかった。様々な噂、憶測が飛び交う中で、謎は深まるばかりであった。捜索が進む過程で、不審人物に関する証言が続々と出てくる。怪しげな神父、黒い大男などの存在が報告されるが、核心に触れるものではない。そして、パリを離れた地方でも、この事件のことが広まるにつれて、様々な動きと噂が拡散していく。パリの捜査当局としても、極力事件の影響を抑えることを各地方に指示すると共に、不審者等の情報の要請を行うことになる。また民衆たちは、今回の事件に驚き、王の容態に注意を払うようになった。その動きはパリだけではなく、１月14日にはボルドーでも快癒を求める幅広い民衆の動きが見られたことが報告さ

れている。そして、1月17日には、傷が大事に至らぬものであることを知って、安堵し、喜ぶマルセイユの人々のことが報告されている。政策の失敗等により、一時王から離れていた人心がまた回帰していくように思える。

捜査が進行していく中で、不審人物たちが逮捕され、ダミヤンとの関連を調べられていく。1月13日には、Chaveau が、14日には Mesquet などが逮捕され、1月21日には容疑者とされる Pansin の移送などが報告されている。2月4日に殺人事件容疑者として逮捕された Richard にも、王の事件への関与を巡って、捜査の手が及んでいく。今回は事件が重大であるがゆえに、地方で発生した事件などの別件で検挙された容疑者たちも、普段とは異なり、ダミヤンとの関連を改めて綿密に調査されることになったのである。しかしこのように入念に行われた取り調べにおいても、確たる証言も得られぬまま、この国王暗殺未遂事件はダミヤンの単独の犯行という形に向かっていく。

またこの事件は、それを巡って人々の噂、語りが様々な形で駆け巡っていくとともに、各種の文書が非合法的な形も含めて、広がっていく契機も作り出すこととなった。当時多くの出版関係者は、発禁文書で生計を立てていた。このダミヤンの事件も彼らにとっては、格好の題材となり、多くの出版物が出回ることとなった。イエズス会の策謀を語るものもあれば、高等法院やジャンセニストの戦略を語るものもあった。そうした文書の多くは、非合法とされ、焼却処分の対象となった。実際2月8日には、現状の治安の乱れとそうした文書の流通との関係が指摘され、断固たる処置をとる必要性を説く資料が出現している。3月8日には、非合法文書印刷所摘発と Champelaux らのバスチーユ連行が報告されている。そして、3月30日には、*Réfléxions sur l'attentat, Lettre d'un patriote, Déclaration de guerre* の3著作の焚書の布告が報告されている。こうした出版状況と並んで、この事件が人々の想像力に及ぼした影響の大きさを無視することはできない。それは、もちろん人々が語る噂話の拡大などによっても知ることができる。捜査当局も情報の収集に努めながらも、噂の肥大が捜査に及ぼす弊害についても、かなりの配慮を持っていたことがわかる。そうした語りの例としては、ある女子修道院の場合があげられる。事件の方が伝わるや否や、その襲撃を事前に知っていたと証言する少女が現れるのである。捜査の結果、それは虚言と判明する。また別の例としては、友人がすでに王への犯行を知っていたとの証言をしたとして、その友人を告発する者が現れる。この告発を受けた少年アルマンは逮捕されるが、その後の調査により、告発をした少年の虚言であることがわかり、その少年が逮捕され、アルマンは釈放されることになる[3]。このようにダミヤン事件は、当時の状況において数々のエピソードを生むものとなっている。

そして、ついに事態は最終局面に至る。1757年3月27日に処刑の日を迎えることになるのである。国王に危害を加えた者として、ダミヤンは過酷な刑を受ける。ミシェル・フーコーが、『監視と懲罰』の冒頭において、克明に紹介している。ダミヤンは、護送車で広場に連れてこられた後に、以下のようにされることが判決に述べられていた。

> (…) 処刑台のうえで、胸、腕、腿、脹らはぎを灼熱したやっとこで懲らしめ、その右手は、国王殺害を犯したさいの短刀を握らせたまま、硫黄の火で焼かれるべし、ついで、やっとこで懲らしめた箇所へ、溶かした鉛、煮えたぎる油、焼けつく松脂、蝋と硫黄の溶解物を浴びせかけ、さらに体は四頭の馬に四裂きにさせたうえ、手足と体は焼きつくして、その灰はまき散らすべし[4]

今日からみると、実に残酷な刑であるが、それを見ようとして、多くの人々が貴賤を問わず、広場に集まったのも事実である。それが必要とされた背景をフーコーは『監視と懲罰』の中で分析している。こうした身体刑はこれ以後次第に必要とされなくなり、それとともに、新たな権力形態が出

現することとなるというわけである[5]。フーコーの分析はそうした新しい権力の出現に注目するわけであるが、本論ではこれを逆に読み込んでいこう。つまり、この時点において、こうした身体刑に支えられるような権力形態が存在したということである。これを確認した上で、もう一度事件の方に戻って考えてみよう。

１－２：事件が開く読み取りの構図

１－２－ａ：王とダミヤン

なぜ事件に戻るかと言えば、この事件が国王暗殺未遂事件という重要な政治的な事柄であると同時に、これが人々の想像力を刺激して、様々な読み取りの構図が提出される契機となったからである。そして、その構図を分析する中で、当時の人々が前提としていた認識の枠組みが浮かび上がってくるからである。18世紀のエピステーメーを考えるための道を開いてくれると思えるのである。

事件においては、まずその犯人たるダミヤンに関心が集まる。彼は偉大な王を殺そうとした者として、王と同等とは言わないにしても、それに対応する別格の存在感を手にすることになる。この事件に関して、同時代のメルシエは興味深いエピソードを紹介している。

> （…）ある若い外科医がもぐりこんで、この王殺しを貪るように眺めていたが、ダミヤンのほうもその外科医の視線に気づいて、「あいつを逮捕してくれ」と言った。若い外科医は逮捕された。ダミヤンは、彼の好奇心を罰するために、ただ恐がらせようとしただけだ、と言ったが、その若者の心の中の恐怖心が激しすぎたために、恐怖のあまり死んでしまった[6]。

王殺しを企てた者は、その行為の大きさ故に、君主と並ぶ力を得るかのようである。実際メルシエもこの犯人のことを「君主に向かってあえて手を下しただけに、まるで鎖につながれた君主といった扱いだった」[7] と述べている。王と同等に扱われるようなダミヤンであるが、そもそも王とは、いかなるものであったのか。その存在がどのように考えられてきたか簡単に振り返ってみよう。

１－２－ｂ：王とは

中世以来王権は様々な変化を受けてきたが、その根底には、王が普通の人間ではありえないという考え方があった。カントーロヴィッチなどを引くまでもなく、王は起源からふたつの身体を持つべく、定められていた[8]。生身の私的身体だけでなく、国家を体現すべく、象徴的な身体を持たねばならない。そうした特異性を持つからこそ、王は様々な儀式を執り行うことができたのであった。たとえば、入市式なども、都市に入るという具体的な所作が象徴的なレベルで人々に理解され、王の及ぼす権力関係というものを明確な形で規定していく。儀式はそこに参加できる階層とそれを眺めるだけの人々との間に明確な境界線を引き、その分割の上に成立する組織の総体を確認する契機となる。中心にいる者が王である。言ってみれば、王は人々が属す秩序を現前させ、人々の方はそれを追認することで、枠組みの構造の全体を理解する。王はそうした認識のための準拠点なのである。さらに王とは能力を持つものでもある。実際古代の王は超自然的な力の体現者とされ、病気なども治癒することができると考えられた。その点から言えば、ダミヤンの影響力のもとで死に至る外科医のエピソードには、この古代の呪術的な王の流れを見る気がする。

また王にまつわる別の面にも注目する必要がある。王は王権の正当性、永続性を確保するものでなければならない。ただし、王は神ではないので、永遠の生命を保持することはできない。そこで歴代の王が死すときには、それまで体現していた力を新たな王へと継承していかねばならない。そ

こには死と復活という主題がある。言い換えれば、王には死の世界との接触を保持することで、それを生へと転換することが求められるのである。王は聖なる世界、異界に参入できる特別な存在と考えられた。崩御の時の喪の儀式は、各地で独特の様式で行われる。王の死骸の脇に、それを模した存在が、場合によっては蝋人形のようなものが作成されておかれることもあった。死した王が保持していた力は一度その依り代のような存在へと移され、そこから新たな王へと継承されていくように考えられた[9]。また王にまつわる死と再生の主題は、カーニヴァルなどにも見いだすことができる。そこでは、カーニヴァル期間中には、王を模した大きな人形が作成され、行事の最後に、その人形に火が放たれ、燃やされることになる。その焼尽とともにカーニヴァルが終結するとともに、参加者全員の幸福が祈念されるのである。ここには、いわば生け贄としての王の姿がある。生け贄とは古代以来、その命を賭して、共同体の安定を確保するものであった。共同体からは隔絶された特別な存在として、その特殊性ゆえにより神に近いものとして、組織全体の運命が賭けられたのであり、その絶対的な個別性故に王に比すべきものと考えられた。こうして、王を巡る関係性の輪が形成されていく。王は、共同体から隔絶される者たちと、みずからの特殊性を通じて、つながりを持ちうるのである。共同体の最上位に位置するものが、その最下層からもはみ出ようとするものと結ばれる。ここには聖なるものをめぐる独特の遠近法がある。その流れの中で、時代が下っていくと、王には絶えず道化という不思議な存在が脇につくことになるのである。

１－２－ｃ：近代に向けての過程

ただ近代へと至る過程において、王はそうした呪術的な側面を脱却して、力を象徴的な次元の方へと転移させていったことも思い起こしておこう。古い形の力の方向をずらしながら、近代的な権力機構の中に、いかにその力を新たな形で組み入れていくかが、大きな問題となった。ルイ14世から成立してくる絶対王政の課題もそこにあったと言える。とくに17世紀あたりから問題になっていくふたつの世界、つまり中世から連続している封建的世界と新たに登場してくる市場経済世界の間に安定した関係を作り出すことが求められていたのであった。ここで17世紀以降の王権の展開をごく簡単に振り返っておこう。

アポストリデスによれば、この歴史過程においてなされたことは、王の象徴的な身体の強化であった。はじめのうちは、積極的に儀式のイニシアティブを取っていたルイ14世も1670年代後半には、前面に出ることが少なくなってくる[10]。当初は身体という存在が重視され、王の現前によって、典礼の重要性が確保されていたが、式典の様式が確立されていくうちに、実際には王の姿がなくても、儀礼は可能となっていったのである。王が不在でも、王を表象しうるものがあれば、十分に機能が達成されるようになった。こうして王の身体の象徴的なレベルが確立されていくうちに、現実的な身体の方は制度、機構の中から消えていく。各組織は、王の名のもとに、自動的に職務を遂行していく。王とは、そうした連動体系に与えられる名にすぎなくなる。こうして諸制度を円滑に導いていく操縦者としての王は、その高度な象徴化の達成の中で自らの身体を希薄にしていき、制度と一体化した機械のような存在となるのである[11]。

こうした状況を踏まえながら、新たに啓蒙思想が生まれていく18世紀を考えていこう。当初は人々の心をとらえていたルイ15世もその治世を通じて、次第に臣民たちの支持を失っていく。特に高等法院などをはじめとする批判的な勢力との関係が大きな問題となる。確かに、1744年に王が病に倒れると、国中から幅広い同情と哀れみの気持ちが王に寄せられたが、以後この君主は臣民たちを引き寄せることはできなくなる。外交的、政治的な面での政策上の様々な理由があるにせよ、また啓蒙思想をはじめとする新思想の広まりもあるにせよ、人々は以前とは異なる視点で王を見るように

なったのである[12]。

こうした中でダミヤン事件が起こる。ここにおいて王は再び人々の関心を引くようになる。王に対する同情心が次第にかきたてられ、王権のオーラ性がつかの間蘇るように思われる。君主の身体が生々しい形で人々の心の中に現れる。傷つけられた王の肉体の表象が人々の意識の中で、権力の問題を鮮やかな形で突きつけてくる。逆に言えば、その流された王の血というイメージが人々と王との関係を一時的にせよ活性化したと言える[13]。ここにおいては、王権にたいする人民の集合的な感性、無意識的なレベルも含めての感性が問われていくことになる。

そして、事件の読解を一層複雑にするのが、この世紀の特性である。18世紀は啓蒙の世紀と言われて、知識の光が時代をあまねく照らしていくようなイメージがある。しかし、光がどこまでも照らしているのであれば、ことさら光を強調する必要はないはずである。この時代において、光に焦点が当たるというのは、対抗する闇の力が存在したからであり、それが強固な力を持っていればこそ、光による闘いとその勝利が強く語られることになったわけである。実際、この時代においては、1727年パリのサン・メダール教会で起こった奇跡により、多くの人々がそこに殺到する事件が発生している。そして、その騒ぎを風刺して、ここでの奇跡を禁ずるとの王令が発せられたという話まで作られた。ここにも王という表象が登場している。そして、18世紀の中葉に庶民の子供たちが行方不明になるという事件が発生すると、その事件にたいして、人々の集合的な意識の中では、上層階級の人々が自分たちの子供たちを誘拐し、子供たちを殺し、その血の風呂により、彼らのおぞましい病を治癒しているという図式が出来上がったのである。その活動の頂点にいるのが王たるルイ15世であった。そのイメージは庶民階層の中で、現実化し、暴動のようなものも発生している[14]。このようにこの時代には、合理性と不合理性が共存し、対抗しあっているのである。こうした複雑性が事件への解釈を困難にしていることを確認しておきたい。

さらに、この事件を理解しがたくしているのは、犯行を企てたダミヤンが、その目的は王の殺害ではないと語っていることである。彼はその目的を王への警告であったと述べている[15]。彼が求めたのは、王を殺すということではなく、むしろ王と対話の関係を持ちたかったのである。アンシャン・レジーム下において、人民は王といかなる形のコミュニケーションを持てるのだろうか。ダミヤン以前に、王との関係としてどのような形態が可能であったのかを調べてみたい。

王との交流にあたっては、しばしば暴力が伴うことを指摘したのは、先に言及したアポストリデスである。彼はその例として、17世紀の日記に載ったあるエピソードを紹介している。

> ヴェルサイユの劇場の機械仕掛けで働いていた息子が仕事の最中に落下して死んだ。特別裁判所で非難された母親は、悲しみのあまり、国王の注意を惹こうとして、白紙の請願書を提出した。効果があって、国王はお笑いになりながら、何が望みなのかを聞きただされた。すると、女は国王を売春婦と寝る男だの、機械を操る王だの（…）たわ言を吐いたので、国王はびっくりなされ、自分のことを言っているのか、と尋ねられた。女はそうだと答え、話し続けた。女は捕らえられ、すぐ鞭打ちの刑に処せられ、精神病院に連れていかれた。鞭打ちの刑は、全く容赦なく、サン＝ジェルマンの町でおこなわれた。女は一言も口にせず、痛みを、まるで殉教者のように、そして神への愛のためでもあるかのように、じっと耐えていた[16]。

アポステリデスは民衆が王権と遭遇する際の暴力性の例として、このエピソードを引いている。王と接近したこの女は、最終的には刑罰を受け、精神病院に収監される。しかし、彼女は、結果として、王との会見には成功したとも言える。では、なぜそれほど王との交流が求められるのだろうか。

それは王がすべてを見通す者だからである。少なくともそれができる者とみなされていた。

王とは、すべてを見抜く目を持つものである。少なくとも17世紀の臣民たちはそう感じていたように思われる。君主は臣下たちの心を見通すことができるが、それは彼らがそれを許すからではなく、すでに超能力がこの権力者には備わっていたためである[17]。王は廷臣たちのあらゆることを読み取ることが可能であり、廷臣たちはそのまなざしを逃れる術はない。逆に言えば、たとえ白紙であろうと、王はそこにこめられているものを読み取れるはずだという考え方もできるはずである。このエピソードの女性も王のまなざしの完全性を前提とした上で、伝達回路を開こうとしたのではないだろうか。

ダミヤンの時代において、ルイ15世は、こうした理想的な王権モデルからは離れていたかと思われる。ただそれゆえにこそ、そのずれを正すための警告を発すべく、ダミヤンが犯行に及んだと言うことは考えられる。王をあるべき姿へと立ち返らせるという動機である。たしかに方法としては、政治的な対抗手段を用いて王を諫めるというような高等法院などが取った戦略とは異なるものであった。直接的ともいうような訴えかけであったといえる。そこで求められるのは、王との直接交流である。そうしたことを図ろうとする者は、もはや普通の人間ではなく、特別の存在とならざるを得ない。それは狂人、愚者、犯罪者などをはじめとする共同体から逸脱した存在に連なる者であり、その企てゆえに、大いなる暴力を呼び込んでしまうのである。実際、すでに見たようにダミヤンは、恐ろしい処刑をうけることになる。ここにおいて、王の持つ超能力性、そしてその力が呼び込む分身とも言える異者の群れ、さらにそこから発動する暴力の嵐を確認することができるように思われる。

１－２－ｄ：明確化を求める方向性：陰謀という解読への熱意

ダミヤン事件が、王権の特異性及びそれと対抗しうるような特別な存在との関係から分析が可能であるのは見たとおりである。しかし、それだけで済ますとすれば、事件の複雑性は闇の中に閉ざされたままとなろう。もう一つの解釈が存在したからである。それは陰謀という解釈図式である。

ダミヤンの特異性を強調するあまり、この事件に関する彼の犯行の単独性に注目する意見がある中で、当初よりこの事件が、彼一人の犯行ではないとする見方が存在した。犯行数日で、それがイエズス会の策謀によるものではないかとする意見を紹介する手紙が現れている[18]。そしてダミヤン逮捕後も、取り調べは続き、彼から共犯者の情報を引き出そうとしていることがわかる。そして、それに連動して不審者が逮捕されていく。この事件の大きな渦の中で、12歳の少年が逮捕されるという事態まで生じた[19]。

この事件が注目されるべきであるのは、出来事自体の重要性もさることながら、その経過を巡って、様々な言説が、あらゆる階層を通じて形成されていったからである。その大きな運動は特筆に値するものと思われる。その反響の大きさは数々の流言飛語を生み、特にパリの街の場合は、そうした言説が捜査にまで影響を及ぼしかねないという状況であった。その言説の中でひときわ大きかったのは、陰謀説であり、それもイエズス会によるというものであった[20]。

すでに述べたように、当時発禁文書で生計を立てていた多くの出版関係者は、このダミヤンの事件を格好の題材とし、数々の著作が出回っていった。その中にも陰謀を語るものが現れる。

> それでは、この事件を生み出したものは何か。それを隠す雲が厚ければ厚いほど、それを見通すことが重要となってくる。殺人者を処刑しても何もならない（…）
>
> その男が、確かだと言われているように、ひどい境遇に生まれ、そこで暮らしてきたのなら、そのことだけでも、この男は、密かな敵たちに怒りを吹き込まれた犠牲者にすぎないことは明

白である。名もない身分も低いものが社会の中で、王を殺めようなどといった個人的な恨みなど持ったはずはないのである[21]。

ここにおいては、ダミヤンの境遇を考慮した上で、そこから彼を操ろうとしたものたちの犯行を考えようとしていることがわかる。そして、その探求の中で、著者はイエズス会に至るのである。

（…）罪があるとすれば、彼ら（＝イエズス会士たち）だけであり、彼らこそ、その罪を司法の厳しい目から隠すことができるのである。彼らだけがそうしたことに成功するのである[22]。

そして、著者は、論述を締めくくるにあたり、二つのことを確認しようとする。一つは、王への犯行に及んだ者が、外部からの働きかけなく、自分の意思で行動したとは考え難いということである。二つ目は、この犯行を企てた者たちに対しては、事の重大さに鑑みて、その追求を止む事なく続け、真相を暴き、その犯した罪に見合った罰を与えるべきだという事である。ここからも著者が共犯者たちの存在を確信し、その裁きを求めていることがわかる[23]。

こうした方向は、王の特権性からくる解釈と比べれば、また別な印象を与える。犯行に及んだ動機を考え、そこに至った経緯を想定するとき、そうした動きを画策する組織の姿が浮かび上がるというわけである。ダミヤンという点から出発して、その点から導き出されていく壮大な体系の姿を立証しようという試みである。より分析的な解釈法とも言える。ただこの解釈図式は突然発生したわけではなく、そのモデルとされるものがある。それは、16世紀のフランスにおける宗教戦争時のリーグ派の策謀である。その事件から伝わる集団的な記憶において「陰謀」という概念が蘇るのである。ダミヤン個人が可視の状況にある中で、その下に不可視の大きな組織の存在を見ようとするのである。それはある人々にとっては、イエズス会であり、また別の人々には、王に反抗する貴族勢力であったり、また高等法院などを中心とするジャンセニストたちであったりする。ただ個人の背景に大きな組織を想定する点では、同じ構造を持つと言える。

この方式は、あくまでも王という１点にこだわる解釈図式と比べれば、結論の出方を別とすれば、より論理的な過程を踏んでいると思われる。点の特殊性を指摘して満足するのではなく、そうした点を生成する過程全体を説明しようとする意図が存在するからである。部分から全体に至ろうとする大きな試みにおいて、18世紀啓蒙主義的とも言えるようなプロセスを考えることができる。それは言語の問題を追及しながら、その起源にまで至ろうとした研究が存在した、この時代らしいものとも言える。

１－３：二つの見方の出会う地点

これまでダミヤン事件について、解釈の形として、主として二つの見方が存在していることを見てきた。事件を巡って人々は、基本的にこの二つの図式に依拠しながら、事件を受けとめようとしたわけである。この解釈の共存性から何を読み取るべきなのだろうか。ミシェル・フーコーは、そこに身体刑が重要性を失っていく中で成立する新しい支配権力の誕生を見ようとした[25]。この時代を生きたメルシエはダミヤンの事件をその前の時代アンリ四世を殺害したラヴァイヤックの事件と比較しながら、そこに差異を読みこもうとしている。

この犯罪者（＝ダミヤン）に科せられる死刑の種類ははっきりと決まっていた。裁判官はただラヴァイヤックに対して行われた判決を繰り返すだけでよかった。君主は死ななかったけれ

ども、刑罰は少しも和らげられなかったところをみると、この犯罪はきっともっとも大きなものであるに違いない。

処刑の当日、国じゅうが好奇心に駆られて、この世にも稀な拷問を見物しようとやっきになった。(…) 犯人が、もっとも長時間、この上なく残酷な刑罰によって、大罪をあがなっているその広場から、あわれみと同情は消え去っていた。その話を読めば、後世の人々は慄然とするだろう、それはひどいものだった。

人々がこういうひどいことを我々の習俗や哲学とつじつまが合うように説明しようと苦労する日が、そのうち来るかもしれない。だが古い法律の命じるところによれば、おなじ責苦が繰り返されなければならなかったのであり、また高等法院は1610年に下された判決を何ひとつ変更しなかったのである[26]。

ダミヤンに対してラヴァイヤックとおなじ残酷な刑罰が行使されることに批判的なメルシエの姿勢を指摘することができるだろう。もはや時代はアンリ4世の頃とは異なっている。王権に対する態度には揺らぎが生まれている。王に向かう視線は、王権を支える基盤を見出そうとするとき、オーラを帯びたような王の身体に向かうよりは、身体から象徴的に構成されていく制度機構の方に落ち着くのである。王の肉体が問題なのであれば、その損壊に対しては、厳罰をもって臨む身体刑は十分説得力を持ちうるはずである。しかし、問われていくのが、身体から象徴的に構築される権力機構であるならば、むしろ体系上の整合性が問題となるだろう。機構面の一貫性の観点から、メルシエは厳密な空間分割を要求する。祝祭の時の花火に関する記述を見てみよう。

この花火の打ち上げのために、グレーヴ広場が選ばれるということ、そしてラヴァイヤックやダミヤンを四つ裂きの刑にしたおなじ敷石の上に、国王の肖像が麗々しく掲げられるなどということは、まったく不可解である。公衆の歓喜の象徴が、どうして車裂きや火焙りの後を継ぎうるのだろう[27]。

身体損壊の儀式的な重要性が認識されればこそ、特権的な場所として、おなじ広場で刑罰も祝宴も挙行しうるであろう。実際中世的世界観はそうした方針を否定しはしなかった。ただそうした一つの場に多元的な意味を付与しようとする立場は、もはやメルシエには支持し難いものと映った。新しい政治支配機構の認識に繋がるものが生まれてきていると見做すことができよう。

ただここに難しい点が現れていることに注意しよう。この新しい機構は、決して古いものの乗り越えとして現れてきているわけではないのである。フーコーも絶えず意識的であったが、彼の図式は、従来の進歩史観の焼き直しなどではない。古代からの王権的な見方が限界に来ている中で、体系的な形を取りつつあった見解がより完全な形になって、19世紀以降の体制が生まれていくわけではないのだ。これまで述べてきた王への古代的な視線が機能しなくなるとともに、陰謀史観的な見方がより論理的なものに変化して、19世紀以降の歩みの基礎になったというわけではない。19世紀以降の新しい動きをみれば、その前の段階をすべてその過程に至るための準備と位置づけてしまいたい欲望が存在することは否定できない。またそうした欲望に従って歴史を構成しようとするとき、それなりの整合性が確保されてしまうことも問題であろう。

そうした誘惑が存在するのを意識しながら、探求を続けてみたい。18世紀に存在するこのふたつの見方の共存の中で、その関係とそこから生み出されてくる認識の枠組みを考察してみたい。新旧の対立を想定して、そこに新しきものによる古いものの乗り越えという図式を適用しようとするの

とは異なる方針を展開しようとするとき、このダミヤン事件は格好の視点を提供してくれるように思われる。

2：ルソーに向けての読解

ダミヤン事件の解釈において、共存する複数の見解があったからといって、それとルソーはどのような関係を結ぶのだろうか。ルソーに言及することで、この問題に新たな光を与えることができるのだろうか。あるいは、この事件の分析を踏まえることでルソーの著作に新しい読解の可能性の地平が開けるのだろうか。むしろ事件からの影響を考えるのならば、ディドロの方が大きいのではないだろうか。実際この事件により、言論統制が厳しくなり、百科全書の刊行作業は厳しさを増していき、同時に協力者たちのうちからも脱退者が出て来る中で、苦境に立たされることになるからである[28]。確かに、その方向の方が、実証的にも、資料の面でも研究を進めやすい気もする。しかし、ルソーとこの事件との関係で考えたいのは、そうした現実的なレベルのことだけではないのだ。ルソー自身の意識の深層にまでも踏み込む覚悟をしながら、ルソーとこの事件との関係について読解を進めてみたい。

注

1　こうした方向でのアプローチを、1999年以来同様な傾向の先行研究も見出せぬままに行ってきた。その最初の試みについては、以下参照。
阿尾安泰「イメージ表象分析の試み ── ドンキホーテ、ルソー、ダミヤン ──」、『ステラ』、九州大学フランス語フランス文学研究会、第18号、1999年、61-82頁。
そうした中で、現在では、こうした主題をあつかう研究も現れ、特に重要なものとして以下のようなものがある。
J-F. Perrin, « SACER ESTOD: Une approche des enjeux politiques et théoriques dans *Rousseau juge de Jean-Jacques* », *Annales de la société Jean-Jacques Roussseau, tome 46*, Droz, 2005, pp.79-113.
Monique et Bernard Cottret, *Jean-Jacques Rousseau en son temps*, Perrin, 2005.

2　この事件の進行の記述については、主として以下の文献に負っている。
François Ravaisson, *Archives de la Bastille : documents inédits. XVI,* Durand, 1866.
Florent Brayard, Arnaud de Maurepas, *Les Français vus par eux-mêmes – Le XVIIIe siècle*, Bouquin, 1996.
Jean-Christian Petitfils, *Louis XVI 1.1754-1786*, Perrin, 2005.
René-Louis de Voyer Argenson, *Journal du marquis d'Argenson, volume 11, L'alliance autrichienne Journal du règne de Louis XV : 1755-1757*, Paléo, 2006.
Claude Quétel, *La Bastille dévoilée par ses archives*, Omnibus, 2013.
また適宜、Bastille の archives を参照している。

3　女子修道院で犯行を知っていたと証言する13歳の少女については、以下参照。
Ravaisson, *op. cit*., p.432.
このアルマン少年の事件については、以下の拙論参照。
阿尾安泰「アルマン少年の出来事 ── ダミヤン事件の示す18世紀における王と人民の関係」、『言語文化論究』2002年、九州大学言語文化研究院。

4 Michel Foucaul, *Surveiller et punir,* Gallimard, 1975, p.9.（ミシェル・フーコー『監獄の誕生』新潮社、1977年、９頁。）
5 Foucault, *op. cit*., pp.68-72.（フーコー前掲書、67-71頁。）
6 Louis Sébastien Mercier, *Tableau de Paris, tome II*, Mercure d France, 1994, p.608.
（セバスチアン・メルシエ『18世紀パリ生活誌』岩波書店、1989年、下巻298頁。）
7 *Ibid*.
8 エルンスト・カントーロヴィチ『王の二つの身体』平凡社、1992年。
9 18世紀においても、そうした知識は伝承されている。例えば、百科全書の項目 “Apothéose” を参照のこと。
10 J-M. アポストリデス『機械としての王』みすず書房、1966年、168頁。
11 同書、201頁。
12 Jean Viguerie, *Histoire et dictionnaire du temps des Lumières*, Robert Laffont, 1995, pp.194-195.
13 ただこの事件も決して王権に対抗する勢力の勢いを止めるには至らなかった（voir. *ibid*., p.196）。
またダミヤン事件については、下記も参照。
Pierre Rétat（dir.）, *L'Atentat de Damiens*, Editions du CNRS, 1980.
Dale K. Van Kley, *The Damiens Affair*, Princeton University Press, 1984.
14 当時の具体的な証言としては、例えば、以下参照。
Jacques-Louis Ménétra, *Journal de ma vie*, Albin Michel, 1982, pp.33-34.
また当時の民衆の動きについては、以下参照。
Arlette Farge, *Vivre dans la rue*, Gallimard / Julliard, 1979.
15 Viguerie, *op. cit*., p.196 . Quétel, *op. cit*., p.23.
16 アポストリデス前掲書、２頁。
17 同書、54頁。
18 Ravaisson, *op. cit*., p.427.
19 詳細は、注３の拙論の他に以下参照。
Quétel, *op. cit*., pp.40-42.
20 そうした流言飛語の横行状態については、例えば以下参照。
Florent BRAYARD, Arnaud de MAUREPAS, *Les Français vus par eux-mêmes – Le XVIIIe siècle*, Bouquin, 1996, pp.1115-1116.
21 Pierre Jean Grosley, *Réflexion sur l'attentat*, in *Les iniquités découverts*, Londres, 1760, p.4.
22 *Ibid*., p.16.
23 *Ibid*., p.24.
24 こうした見解については、以下参照。
Perrin, *op. cit*., pp.90-91.
25 Foucault, *op. cit*., pp.71-72.（フーコー前掲書、69-71頁。）
26 Mercier, op. cit, pp.608-609.（メルシエ前掲書、下巻297頁。）
27 Mercier, *op. cit., tome I,* p.561.（メルシエ前掲書、上巻419頁。）
28 こうした状況については、以下参照。
Raymond Trousson, *Diderot*, Gallimard, 2007, p.115 sq.

Jean-Jacques Rousseau et l'attentat de Damiens (1)

Yasuyoshi AO

Le 5 janvier 1757, Robert-François Damiens tente d'assassiner Louis XV au moment où il regagne son carrosse au château de Versailles. L'homme frappe le monarque d'un coup de couteau, mais les nombreuses couches de vêtements du roi ont amorti la force du coup et lui sauvent la vie.

Cet attentat a bouleversé tout le pays. Inutile de souligner le fait que de nombreuses mesures ont été prises pour protéger le pouvoir royal de la France. Mais il est aussi important de signaler que cet événement a exercé une grande influence sur l'imaginaire collectif des Français de cette époque. Jean-Jacques Rousseau ne fait pas exception, puisque ses œuvres autobiographiques ont été inspirées par l'attentat. L'analyse de ce parricide permettra donc d'adopter un nouvel angle de lecture des textes rousseauistes, en particulier des *Dialogues* dont l'importance est souvent soulignée et qui semblent vouloir se refuser à des interprétations cohérentes.